檀

沢木耕太郎

新潮社

檀

沢木耕太郎

新潮社

檀（だん）

発行——一九九五年一〇月二五日
一三刷——一九九六年七月二〇日
著者——沢木耕太郎（さわき こうたろう）
発行者——佐藤隆信
発行所——株式会社新潮社
郵便番号一六二一 東京都新宿区矢来町七一
電話 編集部〇三・三二六六・五四一一
読者係〇三・三二六六・五一一一
振替 〇〇一四〇・五・八〇八
印刷所——大日本印刷株式会社
製本所——加藤製本株式会社

© Kōtarō Sawaki 1995, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-327510-3 C0093

檀

装画　中野弘彦
装幀　新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序

章

1

今年の正月は長女の持っている軽井沢の山荘で過ごした。いや、軽井沢の山荘などというと誤解を招くかもしれない。確かに、山の斜面に建っていて見晴らしはいいが、軽井沢もだいぶ南にあるため浅間山は見えず、山小屋と言った方がいいような大きさしかない。しかし、それでも娘はとても気に入っているらしく、石神井の家にいるときよりはるかにくつろげるとさえ言う。ささやかなものであれ、自分の働きによって手に入れたものだからだろうか。

檀は生涯別荘というものを持たなかった。持てなかったと言いかえてもよい。生前、石神井の住まい以外にも三軒の家を持つことになったが、どれも別荘と呼べるようなものではなかった。中央林間の家は檀の母を住まわせるものだったし、目白のアパートの一室は愛人と暮らすためのものだった。それらに比べれば、晩年になって九州の能古島に求めた古家がもっとも別荘というのに近いかもしれないが、そこに移り住んだのは、気ままに遊び暮らすためではなく、衰えていく体を回復させるためというはっきりとした目的があってのことだった。

だが、かりに檀が別荘を持てたとしても、それを軽井沢に求めることはしなかっただろう。檀には、「いかにも文士風」という振舞いを嫌うところがあり、軽井沢に別荘を建てることが、そ

うした振舞いの象徴でもあるかのように映っていたからだ。
檀が軽井沢を好まなかった理由はもうひとつある。泳ぐ場所がなかったことだ。
他人の眼からは放埒を極めた生き方をしてきたと見られがちな檀は、一方で、ほとんど趣味というものを持てない人でもあった。その檀が、たったひとつ愛したのが泳ぐことだった。幼いころから、檀が夏を楽しむのに必要なものは水だった。海でも、川でも、泳げさえすればいい。いちど別荘を買わないかと勧められ、心を動かしたものの最終的にお断りすることになったのは、そこに泳ぐ場所がなかったからだった。
確かに檀は軽井沢を嫌っていた。だが、娘が別荘のようなものを建てることに反対したかどうかはわからない。娘は娘と思っていたし、生きていれば、存外、喜んで私と出向いたかもしれない。

不思議なことに、この山荘にくると、娘は嬉々として家事を始める。
石神井の家では、自分の部屋が衣装や小物などで溢れ、収拾がつかないほどになっている。根が几帳面で、片付けるなら徹底的にやらなければ気がすまないため、かえって手がつけられなくなっているらしい。だが、この山荘ではすべてが意のままになるので気持がよいらしいのだ。
だから私は、ここに来るといつもの家事から解放され、のんびりすることができる。この正月も、家からおせち料理を持ってきただけで、あとはすべて娘に任せ、好きなように過ごすことが

できた。そこで、私は家から持ってきた『火宅の人』を読むことにした。

2

去年の暮れ頃から、檀について考えることが多くなった。

それまでは、十七回忌も無事に終わり、すべてが遠くなりつつあった。仏壇の花が枯れかけているのに気がつかないこともあり、お供えした到来物をしばらく下げ忘れてしまったりもする。そのようにして、檀の思い出も淡いものになっていくのだろうと思っていた。

ところが、去年の秋、ある方が訪ねていらした。檀一雄についての話を聞きたいというのだ。私はお断りをしようと思った。期待されているような話ができるとは思えなかったし、檀の思い出を語ることは、必ずしも楽しいことばかりでないことが予想できたからだ。檀の死後、乞われて一、二度お話ししたことはあるが、それ以外はすべてお断りしていた。しかも、最近は耳の具合が悪くなり、相手の言葉が聞き取りにくくなっている。七十歳を越えたばかりで耳が遠くなるというのは恥ずかしいかぎりだが、中国を旅行して帰ってきてからどうも具合が悪いのだ。

しかし、一度お会いしたあとで、結局引き受けることにした。ひとつには娘の勧めもあった。娘はどこかで父親を偶像視しているところがあるが、檀一雄の像を明瞭にすることは、決して悪いことではないという思いがあるらしい。だが、それ以上に、私がその方の申し出を受けることにしたのは、たとえそれが苦いものであろうと、檀一雄について語っておくことは、やはり遺さ

れた家族の義務なのかもしれないと思うようになったからだ。
そのようにして週に一度の機会がもたれるようになった。毎週月曜か火曜の午後、その方は家にいらっしゃると、檀一雄についてあれこれお訊ねになる。私は私の見てきた檀についてぽつぽつと答える。しかし、そんな簡単なことがずいぶんと難しかった。多くの記憶が曖昧になっていたからだ。いや、記憶そのものは鮮明だとしても、出来事の推移や、時間的な経過が不確かになっている。しゃべりながら、あれはいつのことだったかしら、と何度も立ち往生してしまった。
そこで、この正月に『火宅の人』を読むことにしたのだ。これはある時期の檀についてのかなり正確な記録になっているし、また、その方の質問も、行きつ戻りつしながら、どうしてもそこに帰ってくるからだった。

檀にとって最後の作品となった『火宅の人』は、また檀の代表作ということにもなっている。この本は確かによく売れた。単行本で五十三刷四十七万部、文庫本が上下あわせて百七万部、文学全集の一巻として収録されたものが五万部と、実に百五十万を超える部数が世の中に出ていったことになる。檀の作品でこれ以上売れたものはない。死の床についているときに出版され、死の直前にベストセラーになり、死んでからも売れつづけた。
商業的に成功しただけではなかった。直木賞を受賞して以来、およそ文学賞というものに縁のなかった檀に、読売文学賞と日本文学大賞という大きな賞が立てつづけに与えられることになっ

た。この成功がなかったとしたら、死んだ翌年に全集の刊行が開始されるということもなかったかもしれない。

あらゆる意味において、『火宅の人』は檀とその遺族にとって大きな作品だった。

だが、その『火宅の人』はまた、妻である私にとってつらい作品だった。夫とその愛人との「交情」を描いた作品が、妻にとってつらくないはずがない。

総枚数で一千枚を超える『火宅の人』は、十四年にわたり文芸誌に断続的に掲載されたものだった。私は雑誌発表時にざっと眼を通していたが、単行本になってからは読んでいなかった。だから、この正月に一気に読んだのが通読した初めての経験だった。

しかし、読み進めるうちにあらためて感情がたかぶってきた。当時のことが思い出され、つらいところにくると自分の相が険しくなるのがわかった。これまで、つらかったことをすべて忘れることができていたというわけではなかったが、日々の雑事の中に埋もれ、ほとんど思い出さなくても済むようになっていたのだ。ところが、その本の中には、到るところにざらざらと触れてくるものがあり、ぐさりと刺してくるものがあった。そんなことはありません、それは違います、そんなことを思っていたのですか、と何度胸の中で声を上げたことだろう。あるときは、いきなり本を伏せ、バッと立ち上がったこともある。

読み終わって、私は茫然(ぼうぜん)とした。

以前、私は娘たちにこんなことを言ったことがある。檀の傍(そば)には前の奥さんの律子さんがいる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

だろうが、私も死んだら檀のところに行きたいと思う。あるいは邪魔だと言われるかもしれないけれど、あちらの世界への新参者として、少しは檀の知らないニュースを持っていけるから、しばらくは珍しがって私の話にも耳を傾けてくれるかもしれない、と。

歳月が記憶の刺を取り除き、檀の像を美しいものに変えてくれていたのだ。

しかし、眼の前の『火宅の人』には、まさに生身の檀一雄が存在していた。それも、俎板の上に大きな肉の塊がドタッとのっているような存在の仕方で。

「私は、お父様のことを少し美化しすぎていたかもしれないわ」

私が言うと、『火宅の人』はあまり正月にふさわしい読書ではないかもしれないと笑っていた娘が、努めて明るい口調で言った。

「お母さん、死んでもチチのところへは行かれないかもしれないわね」

しかしよく見ると、娘の眼には薄く滲むものがあった。

第一章

1

檀の『火宅の人』は日本脳炎にかかった次郎の姿を描くことから始められている。

《30年　8月7日　次郎発病、日本脳炎ト診断サル》

次郎は昭和三十年の夏に日本脳炎にかかった。一週間もの高熱が続いたあとで、なんとか命は取り留めたものの、ふたたび自分の力でベッドから起き上がることはできなくなった。

その日は、檀が書いている通り、八月の七日だった。

昼間、次郎は女中に連れられ有楽町の読売新聞に行った。私は悪阻がひどく、臥せっていたため、女中に原稿料を受け取りに行ってもらったのだ。

その次郎が夜になって熱を出した。医者に往診に来てもらったが、要領を得ない。扁桃腺が腫れているので扁桃腺炎かもしれないともいう。とにかく少し様子を見てくださいと言い残して帰られたが、次郎の熱はいっこうに下がらない。

明け方近くになって、旅先からそのまま酒場に寄ってきたらしい檀が帰ってきた。私は不安を訴えたが、檀はこう暑くては大人でも参ってしまうというようなことを言うと、酔い潰れるように寝てしまった。

朝になって、突然、次郎が激しい引きつけを起こしはじめた。慌ててシャモジを口に突っ込み、舌を噛み切ることのないように処置してから、女中に医者を呼びにいってもらった。様子を見た医者は、今度はすぐに大きな病院に連れていった方がいいと言い出した。急いでタクシーを呼び、私は次郎を抱いて乗り込んだ。檀は新聞の連載小説の締切を抱えているため家に残った。私が向かったのは、三人の子供を産んだ下落合の聖母病院だった。しかし、着くとすぐに日本脳炎と診断され、即座に伝染病の隔離病棟のある豊多摩病院に移らなければならなくなった。

ふたたびタクシーで運んだものの空いているベッドがない。その日は病室の床に寝かせてもらい夜を明かした。翌日、回診に来てくださった院長さんに、どうか子供を助けてください、とすがりついた。私には、日本脳炎という病気がどのようなものか、まだよくわかっていなかったのだ。

豊多摩病院に入院して三日目に危篤状態に陥った。昏々と眠りつづける次郎に、呼吸麻痺の症状が現れたのだ。付き添っている私は、自分がひどい悪阻であることも忘れるほど、必死になっていた。檀は次郎の死を覚悟し、最後の姿を撮っておこうとカメラを持ってきた。しかし、次郎の強い心臓が危機を救った。かろうじて生き延びられたのだ。

だが、私たちは、助かったという喜びのあとで、後遺症という現実に直面しなくてはならなかった。次郎は以前の次郎ではなくなっていた。話すことはもちろん、自分の力では起き上がることもできなくなってしまったのだ。

次郎の発病は、結婚九年目の私たち夫婦に最初に訪れた試練だったと言えるかもしれない。檀には、敗戦直後に、先妻の律子さんの死を看取るという試練があった。私にも先夫の戦死という悲しみはあったはずだが、それは夢の中の出来事のように実感の薄いものだった。若かったということもあったろう。だが、不具になった次郎の姿は、現実以上の重みをもって私に迫ってきた。それは三十三年間の私の人生において最大の悲しみだった。いや、それ以後の四十年を含めた全人生において最大の、と言ってもよい。

2

私は福岡県柳川市の近郊の農村地帯で生まれ育った。大和という名の村で生まれ、十歳の頃に瀬高という村に移った。

名前はヨソ子という。奇妙な名前だが本名である。少女時代はこの名前が嫌いで、好きな漢字を充てたり、平仮名に書き換えたりしたが、いつの間にか愛着を覚えるようになった。それにしても、姉が松枝で妹が小治だから、私だけ妙な名前をつけられたということになる。もちろん、それには理由があった。姉が生まれて以来、次々と生まれてくる女児が死んでしまう。そこで、私が生まれる直前になって、もしこんど女児が生まれたら、「うちの子」ではなく「よその子」として育てよう、そうすれば長生きしてくれるかもしれないと考えたのだという。ヨソ子という

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.